



296号
2024/9

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



川と暮らす：イヤホンを当てて橋を描く画学生。川辺で洗濯をする女性。少し上流では、近くのレストラン従業員たちが野菜洗いをしていた。これが沱江沿岸に暮らす人々の日常。かなり前に「吊脚楼」が水に浸かる写真付きの記事を新聞で目にしたことがある。今では異常気象等の影響もあり沱江の氾濫は増えているようだ。直近では今年7月初めに洪水が襲った。それでも人々の暮らしは続く。
(2017年9月 湖南省鳳凰県にて 高橋節子)

'わんりい' 2024年9月号の目次は18ページにあります

今月の四字成語、其の儘では日本語で意味が取りづらく、当然、日本語の四字成語辞典にはありません。手持ちの子供向け中国語辞典でも、見当たりませんでした。

・>・>・>・>・>・>

秦の桓公^{かんこう}が晋を討つために出兵しました。晋の將軍魏顛^{ぎえい}と秦の將軍杜回^{とかい}は、共に譲らぬ戦いをして、なかなか勝負がつきませんでした。

ところがある日、魏顛の目に、両軍の間の草むらで、草を結んで罾を作る老人が見えました。そこへ敵の將軍杜回がやって来て、馬が草の罾に足を取られ転びました。落馬した杜回はその場で晋軍の捕虜となり、魏顛は秦軍に大勝しました。

その夜、魏顛は夢を見ました。夢の中に、昼間、草の罾で杜回を捕まえるのを助けてくれた老人が現れて言いました：「私は、あなたの父親の愛妾^{そき}・祖姫の父親です。あなたが、彼女を父上の葬儀で、陪葬しないで助けてくれたので、あなたの恩に報いようと、死後の世界から出て来たのです」。

つまり、魏顛の父親の魏顛^かは、死ぬ間際に、祖姫を自分の墓に陪葬するようにと言い付けました。しかし魏顛は、父親の死後、祖姫を陪葬することはせず、別の男に嫁がせたのでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：他人の恩義を感じて、恩に報いる方法を考えること。

使い方：我々を助けてくれた人に対して、我々は、感恩図報しなくてはならない。

・>・>・>・>・>・>

このお話、もう少し詳しく調べてみると、魏顛の父親・魏顛^かは、病に倒れる前には魏顛に、自身の葬儀で若い妾の祖姫を陪葬する必要はないと話していたの

です。それが、臨終に当たっては、祖姫の陪葬を求めました。しかし魏顛は、父親の臨終の床での願いを無視して、祖姫を他人に嫁がせたのでした。

周りの人が「どうして父親の臨終の床での願いを無視するのか、親不孝ではないか」と訊いたところ、魏顛は「人間は、死が近くなると正常では居られなくなります。父は元気な頃、祖姫の陪葬は必要ないと言

っていました。陪葬するようにとするのは、父の本心ではないと思います。親の本心を叶えるのが親孝行だと考えます」と答えました。

このお話は、春秋左氏伝にあると言われますが、他の出典をあげる本もあります。しかし、驚いたことに、このお話から派生した四字成語は、「感恩図報」ではなく、「結草銜環」なのです。「結草」が、この話の草を



挿絵：満柏画伯

結んで罾を作ることを言っていて、死んでからの恩返しを表します。「銜環」の部分は、西王母に仕えるカワラヒワの恩返しで、活着ている間にする恩返しの話ですが、ここでは省略します。

今月のタイトルの「感恩図報」は「史記・伍子胥列伝」に出てくるお話（これも諸説あり）です。伍子胥が趙を攻めようとした時、若い漁師が舟の櫂を持って現れます。彼は伍子胥が若い時、追っ手に追われて長江の畔で立往生していた時、舟に乗せて助けてくれた漁師の息子でした。聞くと、伍子胥が趙への攻撃をやめると、その息子が趙公からたくさんの褒美がもらえとか。父・漁師への恩義を深く感じている伍子胥は、直ちに兵を引き上げました。この若者は、趙に帰って、王様から大きな土地を賜ったそうです。実は、この話の方が恩返しの話としては有名です。

報恩というのは、中国の人々にとって大事な観念ですから、色々なお話が語られ、3千年の間に錯綜してこんなことになったのでしょう。

白居易の《暮れに立つ》

報告:花岡風子

今日のお題は白居易の《暮れに立つ》という作品でした。4月に《閑行》という作品を鑑賞しましたね。前回もご紹介しましたが、白居易の詩は作風によって三つのジャンルに分類されます。一つは、〈風諭詩〉という社会体制への批判、『売炭翁』などの作品があります。〈感傷詩〉という悲しみの歌、これには『長恨歌』や『琵琶行』があたるでしょう。そして〈閑適詩〉とは、日常生活の中でわき起こる感覚や趣きを詠じたものであり、前回のお題である『閑行』は、〈閑適詩〉、今回の《暮れに立つ》は〈感傷詩〉という悲しみの歌です。

白居易は40歳の時に母を亡くしたので、故郷に帰り当時のしきたりに準じて3年間の喪に服していました。都に戻ると彼のポストはなくなっていたそうです。《暮れに立つ》は、白居易の政治家としての未来にも影がさしていた頃の作品だと言われています。

mù lì

暮立〈七言絶句〉

huáng hūn dú lì fó táng qián

黄昏独立佛堂前

mǎn dì huái huā mǎn shù chán

满地槐花满树蝉

dà dǐ sì shí xīn zǒng kǔ

大抵四时心总苦

jiù zhōng cháng duàn shì qiū tiān

就中肠断是秋天

こうこん

黄昏独り立つ仏堂の前

地に満つる槐花樹に満つる蝉

大抵四時心総べて苦しけれど

就中腸の断たるは是れ秋天

たそがれ時（黄昏）にひとり仏堂の前に立つ舞い散ったえんじゅの花（槐花）が地面を埋め尽くし、木という木には蝉が鳴いているおよそ四季（四時）それぞれ心に悲しみをさそうものだがそのなかでも、腸がちぎれるほどに悲しいのは秋

夕暮れ時、しょんぼりと仏堂の前に立つ作者。人影はなく、刻々と夕闇が迫っています。

足元を見ると槐の花が地面いっぱい落ちていて、木々には蝉がいっぱい止まっている。

ひっそりとした仏堂の中に、蝉の声だけが聞こえています。気持ちはだんだんと下がっていき、「ああ、生きていれば年がら年中悲しいことばかりだが、その中でも断腸の想いをするのは、秋だ」と言っています。日本人の私たちでも、食欲や読書の秋だけでなく、冬に向かっていくもの寂しさなんかはありますが、中国では歴史的に秋のイメージにはもっと厳しいものがあります。「五行思想では戦争、裁判のイメージのほかに、収穫の時期なので、異民族の侵入があり奪略や、殺戮、村の焼き討ちなどとりわけ厳しいことが起きるのが秋ですね」と植田先生。

さて、今NHKの大河ドラマ「光る君へ」で平安貴族たちが、こぞって漢詩を修身として学んでいたことがよくわかりますが、清少納言が自らの学をほめかしたシーンで有名な、「香爐峰の雪は簾をかかげてみる」という一句のある、「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶々東壁に題す」の一節も音読して鑑賞しました。

rì gāo shuì zú yóu yōng qǐ xiǎo gé chóngqīn bú pà hán

日高睡足犹慵起，小阁重衾不怕寒。

yí ài sì zhōng qī zhěn tīng xiāng lú fēng xuě bō lián kàn

遗爱寺钟欹枕听，香炉峰雪拨帘看。

kuāng hù biàn shì táo míng dì sī mǎ réng wéi sòng lǎo guān

匡庐便是逃名地，司马仍为送老官。

xīn tài shēn níng shì guī chù gù xiāng hé dú zài cháng ān

心泰身宁是归处，故乡何独在长安？

白楽天の

「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶々東壁に題す」

日高く睡り足るも、なお起くるにもものうし。小閣にしとねを重ねて寒さをおそれず。

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聴き、香爐峰の雪は簾をかかけてみる。

匡廬は便ち是れ名を逃がるるの地。司馬仍お老送の官。

心泰に身寧きは是れ帰する処。故郷何ぞ独り長安に在らん。

平安時代は男女を問わず、漢詩を覚えるのがインテリである証だったのですね。また、平安時代の日本の宮中では、李白や杜甫より白居易の方がより人気があったということがこの詩からもうかがえます。『白氏文集』は、白居易存命中に日本に伝わり、平安文学に多大な影響を与えました。

「白居易が長恨歌を詠まなければ、楊貴妃もこんなに有名にはならなかったかも」と植田先生、日本の山口県の二尊院に楊貴妃の墓があるのも不思議なことですね。これは、長恨歌の一節にある、楊貴妃と玄宗皇帝の愛を表現した部分で、非常に有名ですね。

zài tiān yuàn zuò bǐ yì niǎo
在天愿作比翼鸟
zài dì yuàn wéi lián lǐ zhī
在地愿为连理枝

天にありては、願わくは比翼の鳥となり、
地にありては願わくは、連理の枝とならん

天に生まれたのなら、比翼の鳥
地上に生まれたのなら、連理の枝となって
未来永劫、添い遂げよう。

生まれ変わっても二人はずっと一緒、比翼の鳥も連理の枝も、現在でも相思相愛のカップルのことを意味します。

時の運命に翻弄されつつも、自分の思想や生き方をつらぬいた白居易。これまで様々な作品に触れてきて思うのは、非常にバランスの取れた人、ということです。植田先生もこんな風におっしゃっていましたが「陶淵明のように田舎に隠遁はしないで、倒れない、岸田内閣みたいだね。でも、悪い方にはいかない。そしてね、赴任先では地方の人

に愛され、女性にもモテたんですよ」。

今回の『暮れに立つ』のように、寂しさ心細さを素直に詠んだ作品からも、その人柄が伺えます。個人的な話で恐縮ですが、若いころ、理由もなく夕暮れ時に何とも言えない焦燥感を感じていた時期がありました。刻々と夕闇が迫る時刻は、それだけで人の心をかき乱す時刻でもあります。さらに厳しさをもたらす秋、そして実際に人生の辛酸をなめた時期でもあり、当時作者の感じていた断腸の想いはいかほどのものだったのでしょうか。しかし白居易は、楽天的な詩もありますし、人生哲学的な言葉もたくさん残してくれています。

一人の人間がここまで多岐に渡る作品を多く残してくれたことに改めて驚嘆します。白居易は、間違いなく私たち日本人にとっても宝ですね。

最後にこんな素敵な言葉もありましたので、添えておきます。

蝸牛角上 何事かを争う
石火光中 此の身を寄す

カタツムリの角ほどの小さな世界で、何を争っているのだ。この世の旅人にすぎない人間は、火打石が発する火花ほどの短い時間しかこの世にとどまれないというのに。

白居易「酒に対す 五首」其の二より



江西省九江市の廬山香炉峰(当地では同名の山が複数あるそうです)
(百度图片より)

「小浪底」の国際的ブランド化(つづき 2)

文と写真=村上直樹

去る 2024 年 6 月 21 日から 7 月 1 日まで大連を旅行した。朝鮮民主主義人民共和国と国境を接する町、丹東市まで日帰り足を伸ばしたほか、「俄羅斯(ロシア)風情街」、「大連森林動物園」、「威尼斯(ベニス)水城」、「南山旅遊風情街(旧日本人街)」など大連市内の観光名所もいくつか巡った。最近話題の「港東五街」にも実際行ってみた。これは「港東五街」という自動車道路の少し上り坂になった地点から高層ビルの谷間に見える海を、とくにそこを横切る豪華客船を含めて撮った写真が最高！(いわゆる「TikTok 映え」する)と、ネット上で話題になり、大連市の役所も積極的に PR している新しい観光スポットである。その日も撮影目的の観光客が集まっており、移動式飲食販売の車も何台か止まっていた。快晴の下、確かに絶景だったが、海はかなり遠く、私のスマホカメラでははっきり映らなかったのここでは省略する。

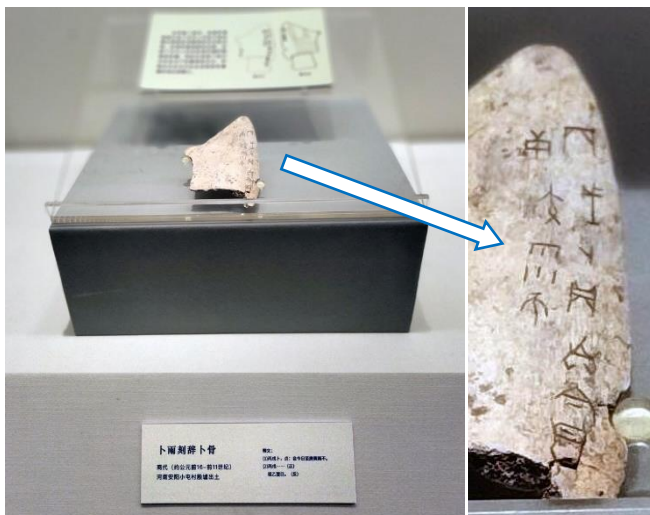
河南省とのつながりでは、7月号の「雑感」でも触れたように今年甲骨文字発見 125 周年であるので、甲骨文字に少し拘ってみた。1つは「旅順博物館」の見学である。ここでは「丙戌の日に卜して占った。今日から庚寅の日までに雨降らないか？」といった意味の卜辞が刻まれた甲骨片「卜雨刻辞卜骨」(河南省安陽市小屯村殷墟出土)を見ることができた(写真参照)。

また、羅振玉の筆になる「甲骨文七言聯」も展示されていた。羅振玉(1866~1940)は、甲骨文字発見

以降その収集・解説に多大な貢献をした「甲骨四堂」の1人として知られている(他の3人は王国維、郭沫若、董作賓。いずれも、号あるいは字に「堂」の文字が含まれているため、こう呼ばれる)。

その羅振玉のひ孫で、自身、甲骨文の伝承者として名高い羅衛国氏が理事長となっている「大連羅振玉甲骨文書画芸術中心」という法人が大連市内にあることをネットで知ったので、早速、訪ねてみることにした。所在地は大連保税区自貿大廈 813 室とある。地下鉄の「大連站」駅から 3 号線に乗り「保税区」駅まで約 30 分で着いた。この周辺は現在では「中国(遼寧)自由貿易試験区大連片区」となっている。「自貿大廈」の 8 階に上がって 813 室はすぐ見つかったものの、中は真っ暗で人がほとんどなかった。近くの人に聞くと、登記上の住所をここにはしているだけで、実態は別のところにあるということらしい。という訳で、残念ながら目的を達することはできなかった。せめてもの思いでビルを写真に収めホテルに戻った。

さて、ここからは前回のつづきである。前回述べたように、小浪底村で進められている「小浪底」ブランド化事業の具体的対象として、旅行商品、とくに「研学」旅行がある。「研学」とは小中高の児童・生徒を対象に教育の一環として実施される団体見学・体験旅行のことである。この「研学」が近年、中国でブームとなっており、マスコミでも盛んに取り上げられている。



「旅順博物館」の甲骨片(2024年6月)



「自貿大廈」(2024年6月)

もちろん、中国における「研学」の歴史は悠久である。2500年ほど前、孔子はしばしば弟子を引き連れて諸国を巡った！しかし、国家レベルで本格的に注目されるようになったのはごく最近である。2016年11月30日に、教育部（日本の文科省に当たる）など11部門が共同で「關於推進中小學生研学旅行的意見」（小中高の児童・生徒の研学旅行を推進することに関する意見）（教基一〔2016〕8号）を発出した。

この「意見」では、団体旅行を通じて「研究性学習和旅行体験」（研究的な学習と旅行体験）を合わせた課外教育活動を実施する意義を強調し、各地で、それぞれの自然環境、文化遺産、産業状況等の違いに応じて積極的に取り組むよう促すとともに、組織管理、経費、安全に対する責任体制など留意すべき点を挙げている。

コロナ禍で2020年からの3年間は活動が大きく停滞したものの、昨年来、「研学」は国内観光市場拡大の牽引役の一角を担っている。2024年7月16日付《人民日報》（海外版）「研学遊成暑期市場主力軍」（研学旅行は夏季市場の主力軍になる）によると、この面で河南省の安陽市は全国的な成功例となっている。冒頭の話題にも関連するが、安陽市には世界文化遺産である殷墟のほか、中国文字博物館、紅旗渠（紅旗水路、2021年12月号の「雑感」参照）といった歴史・文化・革命遺産があるほか、風光明媚な自然にも恵まれている。安陽市の役所もそうした当地の利点を生かすべく、さまざまな施策を講じて研学の目的地としての発展を目指している。

また、中国ではそうした研学が農村振興に結び付けて捉えられている（中国旅遊協會研学旅行分会『2023～2024 中国研学旅行市場發展報告』（2023年12月発行））。たとえ現状で経済的に豊かとは言えない場合でも、農村地域は一般に歴史、文化、自然資源等に恵まれており、農業体験を通じて労働に対する敬意を育むこともできるなど、研学の趣旨に相応しい。地元の農業者が「技術顧問」となって農業体験を指導する例、また、農家が研学に参加する児童・生徒の「民宿」に変わる例なども報告されている。

小浪底ブランドの「小浪底®研学」を運営するのは「小浪底研学産業孵化園」という法人である。写真は小浪底村にある当法人のオフィスビルである。小学



「小浪底研学産業孵化園」(2023年12月)

校の敷地内にあることから、その事業が公益的な性格を持っていることがわかる。

法人紹介のパンフレットによると「走進小浪底、親近黄河、聆聽黄河故事、體驗小浪底黄河文化、感受小浪底黄河生態保護和高質量發展成效」（小浪底に入り込み、黄河に親しく近づき、黄河の物語に耳を傾け、小浪底黄河の生態系保護と高品質な發展の成果を感じる）ことを旨として、研学を企画し提供している。対象は小中の児童・生徒であり、旅行期間は半日から5日までである。パンフレットには教学およびさまざまな活動の指導員として12人が掲載されているほか、研究者など専門家12人が顧問として名を連ねている。

具体的にはテーマ別に以下4つのコースがある。「黄河文化」コースでは、ダム建設に伴う移転で生まれた「小浪底(新)村」を訪れて移民の物語を聞いたり、黄河を巡る遊覧をしたり、黄河の水質検査について学んだりする。「紅色文化」コースでは、小浪底(新)村史館を参観したり、班家溝で革命に関する記念館（5月号「雑感」参照）を見学したりする。一方、「農耕文化」コースでは、農業体験をしたり、ザクロの盆栽を製作したり、イチゴ狩りを楽しんだりする。さらに「伝統文化」コースでは漢方薬について学び、民俗芸術に接したり、伝統的な「香包」（香袋）を製作したりする。このように多種多様な活動が用意され、参加者は「只旅不学、只学不旅」（旅行だけで学ばず、学ばだけで旅行せず）とならずに有意義な時を過ごすことができる。こうした小浪底「研学」ブランドを国際化するにはどのような可能性があるのか、今後の展開が楽しみである。

「秦皇島」から「承德」へ 「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(15)

文と写真 吉光 清

中国は誰もが認める美食の国である。先ごろ視聴した『尚食』という華流ドラマの中では、明の宮廷料理人たちが、中国各地の伝統料理を完成させてゆく姿が見られたが、芸術的で美しい料理に目を奪われ、涎が垂れそうだった。

しかし、代表的な中国料理は一部の小吃を除けば宴席料理なので、個人で旅行しながら、そのような機会を得ることは絶望的で、まして「駆け足旅行」となれば、名物の小吃を口にすることもままならない。

手持ちの観光用の地図の裏面に、承徳の「地方美食」として、「平泉凍兔肉、青龙鼈魚（すっぽん）、陣家醬肘、炒山鶏卷、野味火鍋」が北方宮廷料理として、「驴打滾、焼麦、二仙居碗坨、一百家子白荞面、拨面、鮮花玫瑰、杏仁茶」が地元名物として列挙されていた。これらとは別に「叉子火烧、八宝飯、熏兔肉、荞面蒸餃」などの8品目が写真とともに紹介されていたが、清の西太后の豪華な食卓を思うと、極めて質素な料理内容と感じた。また、魚介や海産物が使用されていない点も中国各地の美食とは異なる点であろう。海から離れた土地ゆえに違う。



地図裏の「清宮銀絲雜面」の写真

それらの中では「清宮銀絲雜面」が、名前からして魅力的だったが、街中の緬屋では食べられそうもなかった。

■酒好きの“二人の仙人”

「関帝廟」を出て、そのまま、ホテルに向けて歩道を進んだところで、「二人の老人」の銅像に出会った。



ハテッ、この二人の老人は？

ハテッ、この老人たちは何者か？ と思い、土台の説明書きを見た。地名の由来が記されていた。

曰く、「乾隆帝の時代、街道の脇に一軒の居酒屋があった。ある日やって来た、みすぼらしい姿の二人の老人を店主は優しく迎え入れたが、二人は言った。

『我らは酒が飲みたい、お腹も空いているがお金は持ち合わせていない。飲み食いさせてくれないだろうか？』、主人は気前よく許したが、二人は昼から日暮れまで呑み続けた。大きな酒甕が空になり、店主はあっけにとられて言った『お二人さん、申し訳ない、酒が無くなった、信じないなら来て見てくれ』、二人は酒甕の前に行き蓋を開け、大きな柄杓で酒を掬い上げて言った『親父さん、甕の中は酒がたっぷりだ。あんたは何で空っぽなんて言うのだ？』。店主が覗き込んでみたら、酒が甕一杯になっていた。顔を上げたら、もう二人の姿は無かった。人々は言った『やって来たのは仙人だ』、そこで、店主はお金を出して、店の前に小さな祠を立てて祀った。当地の文人が『二仙居』と名付けた。

『にほん昔ばなし』にでも出て来そうな、酒呑みが聞いたら大喜びしそうな、のどかな話だった。

改めてあたりを見回すと、「二仙居西街」の額が掲げられた牌坊（門）があった。そこから先は、「二仙居西街」という繁華街らしかった。手持ちの地図を見たが載っていない。これまでは道路の東側の歩道ば



2晩、お世話になった「ホリディ・イン」

かり行き来していたので、道路のこちら側の様子には全く注意が及んでいなかった。「二仙居地下商業街」という広告塔が建っていたので、少し覗いてみようかと思ったが、通りは車の往來が激しくなり、週の始め（月曜日）の喧騒が始まって来ていた。時計を見ると10時になろうとしていた。もはや商業街をブラつく時間的余裕は無かった。

■北京までの長距離バス

ホテルに戻り、チェックアウトし、荷物を転がしながら振り返って見ると、2晩お世話になったホテルが手前のホテルの横から辛うじて顔を出していた。お馴染みになった通りを「新華路」バス停まで歩き、やって来た「1路バス」に2元を入れて乗り込んだ。「承德汽車东站」には11時半に着いた。

次に発車する北京行きの切符を買ってから、売店で飲料水を買った。バスに乗り込み、前から3列目の進行方向左側の窓際に座った。座席はほぼ埋まった状態で11時50分に出発した。隣の席は中国人の中年男性だった。バスは「承德汽車东站」を出ると南下を始め、「長深高速」に入り、承德にやって来た方向とは逆方向に進んでトンネルを潜った。

今回の旅行については、大まかなイメージとして、「トライアングルの移動」と思っていた。つまり、北京から秦皇島へは「京哈高速」を利用してほぼ真西に移動、秦皇島から承德へは「承秦高速」を利用して、北西方向に移動、そして、承德からは南西方向に「長深高速」「首都环线高速」と繋げて北京に戻るので、3都市の位置を線で結ぶと、北京から秦皇島までを三角形の底辺とした、「少し背の低い二等辺三角形」を描くはずである。

車中から見える山間部の景色を面白がって眺めたのも束の間、直ぐに見飽きてしまい、車内は話し声も無く静かだったので、眠気を催してしまう。何度かうウトウトしているうちに、バスはビルの谷間を走っていた。日本の首都高速を走っているようだった。「北京外国語大学」と表示された建物のすぐ傍らを通った。短い渋滞を繰り返した後で、「六里桥」という長距離バスのターミナルに到着した。

■エーッ 今夜は宿無し？

バスの終点については何の予備知識も無かったが、人の流れについて行くと、すぐ地下鉄の「六里桥」駅に着いた。午後4時を過ぎ、ホテルのチェックインには頃合いの時刻になっていた。予約しておいたホテルに向かおうと、「东四」駅までの切符を買うため、切符売り場の窓口に並んだ。数人が並んでいたが、一人の軍服を着た兵士がやって来て、先頭の老人の前に割り込んで切符を購入した。此の国では当たり前のことらしかったが、軍服を着ていれば公務中で特別扱いということなのであろうか？ 急いでいる様子も無いのに、老人の前に割り込むのか？ と、いささか割り切れない思いが残った。

今夜のホテルは、日本を発つ前にホテル予約サイトで、承德のホテルと同時に予約したのだが、「胡同をそのまま利用したホテル」というので、とても楽しみにしていた。予約の際のプリントアウトを持参していた。「东四」駅までは5元だった。駅から出て、小路に示された地名をたよりに探したら、「胡同161」番地は思いの外、簡単に見つけることができた。民家の入り口を入ると、所謂ホテルのフロントとは違う、こごんまりした受け付けがあった。

受付でプリントアウトを示し、今夜の予約があると告げたが、受付の女性はPCの端末をちょっと操作して、そのまま誰かを呼びに行ってしまった。一緒に戻って来た年上の女性が、再び、端末を確かめて言った「予約はされていません」。

予想外の言葉に戸惑いながら、プリントアウトを指し示し、「この通り予約してある」と食い下がった。対して「予約の確認メールを送ったが、返事が無かったのでキャンセルされた」と言う。何と、今夜は宿無しになるのか！ と焦った。 (つづく)

●資料：「承德市城区导览图」、中国地图出版社

約4年前の「娥皇と女英」(第255号、2020年7月号)からスタートしたこのシリーズは、そろそろピリオドを打とうと思っている。この間、約40人の美人を登場させたが、その時代は、古くは紀元前から近代に及ぶ。美人と言っても当時はカメラはないわけだし、絵画に書かれた姿を見て美しいと感じたり、多くの人の評判で美人と言われた人たちである。美人の定義は人によっても異なるであろうし、時代によっても変化する。

今回、最後に登場させる美人を誰にするかいろいろ考えたが、近代日本との繋がりが深く、歴史上記憶に残る女性として『秋瑾』を登場させることにした。

秋瑾(1875年~1907年)は、清末の女性革命家であり、詩人である。祖父が厦門府(福建省)の長官として赴任した関係で一家も一緒に移住、彼女は厦門で生まれた。原籍は紹興府(浙江省)山陰県である。亡くなったのは1907年の7月15日の早朝である。2日前の7月13日、当時の清軍に大通学堂で逮捕されたのだ。大通学堂とは、紹興にある体育専門学校・「大通師範学堂」のことである。死刑を宣告され、紹興市にある軒亭口の刑場で斬首された。享年31歳という若さである。彼女の有名な写真は、清服を嫌って日本に留学した時に詠えた日本の和服姿に長いショールを身にまとい右手に短刀を持ったものである(写真1)。鼻筋が通っていて、意志の強さを感じる美人と言えよう。ある資料には、彼女は「崇高なまでの美貌、優れた詩才、それに論理的な弁論能力、彼女はこれらの天分を兼ね備えている」と書かれている。

そうした彼女の31年間の一生を振り返りつつ冥福を祈りたい。

秋瑾は、女性革命家と書いたが、生まれながらの革命家では勿論ない。時代背景の中で家庭環境や結婚相手に恵まれなかったことなど原因はいくつもある。過激思想に至ったのは先ず、幼少期の



秋瑾の切手 1991年発行(孔夫子旧书网より)

体験と言われる。祖父が赴任した厦門はイギリスが強制的に開かせた港で、府長である祖父は絶えずイギリス人に侮辱され、その怒りが幼い秋瑾に伝わったと言われている。名家で育った彼女は子供の時は“纏足”をさせられていたが、次第に革命に目覚めると、纏足を恥じるようになりその代わりに武芸に励み、刀剣(特に日本刀)を愛好するようになった。一方、母親は教養豊かな女性で、秋瑾は11歳で詩を読むことを覚え、杜甫などの詩集を手放さなかったという。

1895年、彼女が20歳の時、親が決めた湖南省の豪商の長男である王廷鈞と結婚した。北京に住み二人の子供を設けたが、酒浸りの夫に愛想を尽かし、やがて日本への留学を志すようになっていく。清国政府は、国民教育の手段として多くの留学生を日本に派遣した。その数は万を超える状況であった。日本政府も国策として留学生や学校教育をバックアップしていた。当時、日本は明治維新(1868年)をやり遂げ、西洋文化が流入し産業・経済など発展していく時期であった。

しかし、清国政府の思惑とは裏腹に、啓蒙により自国の後進性や惨状に目覚めた留学生の多くは、体制打倒の革命運動に走った。多くの知識青年が国内での弾圧を避け、外国文化を吸収する窓口として先進国になりつつある日本に留学し、横



写真1 (ウイキペディアから)



写真2 (鳳凰網から)



写真3 (ウイキペディアから)

の連絡をとり、立場に応じた革命結社を結成していった。

こうした中で、人一倍知性と気骨に溢れた彼女は、少数の満州族が多数の漢民族を支配し、辮髪や纏足などの満州族の風習を強制し、一方で西欧の列強の言いなりになる、ふがいない清国政府に反旗を翻し、祖国の危機を打開する運動に挺身しなければならないと考えていた。また日本の女子教育が中国より進んでいることを聞いたりしたことが留学熱に拍車をかけ、ついに1904年に家庭を棄て、わずかな所持品や衣類を売って日本に留学し、弘文学院に編入した。この弘文学院は、中国人留学生のための日本語学校で、中でも静岡県出身の松本亀次郎という教育者が知られている。彼は熱心にこの学校で留学生を教育した。

後に彼女は、孫文率いる革命団体である「中国同盟会」に参加したりした。その後実践女学校(現在の実践女子大学)に入学、教育・工芸・看護学などを学んだ。彼女は日本の看護学の教科書を中国語に翻訳し、彼女が発行人となった女性啓蒙雑誌「中国女報」に掲載した。また神楽坂にある武術会にも通い、射撃の訓練や爆薬の製法まで学んだ。

ところが、1905年に日本政府が出した「清国留学生取締規則」に憤慨し、留学を打ち切り、同年12月に帰国した。1907年には徐錫麟が紹興で創った、前述の大通師範学堂の責任者となり、同地

で革命運動に参加し当局に目を付けられるようになった。そして同志の徐錫麟が安徽省安慶で計画した武装蜂起に合わせ、浙江で蜂起する準備を進めていたが、計画が漏洩し逮捕に至ったのである。

前述のように7月15日の夜明け前に処刑されたが、前日の14日に知県(県知事)李宗獄の取り調べに対し、最後に遺書を書かせよ!と要求し有名な次の遺句を遺している。

【秋風秋雨、人を愁殺す】・・・この句はその後、多くの人に詠われたという。

李宗獄の取り調べの後、そのあとに代わった残忍な取調官が、用意した火レンガ、火鎖などの拷問具で自白させようとしたが、彼女はどのような拷問にも耐え目を閉じ、歯を食いしばって一言も吐かなかったという。刑場であった軒亭口には、今では高さ10メートルのコンクリートの「秋瑾烈士紀念碑」(写真2)が設置されている。

秋瑾の死は、新中国黎明期革命運動の精神的支柱となった。その後、1908年に西太后が没し、3年後の1911年の辛亥革命で約270年の長きに亘り権勢を誇った清は滅んだ。

浙江省の省都である「杭州市」には、西湖という有名な湖があり、筆者は数回訪れたが、何回目かの時、湖畔に秋瑾の立像(写真3)があるのを見た。比較的大きな石像で、右手に持った長剣を地面に突き刺した姿であったように記憶している。

「碧霞元君」の来歴

訳：一瀬靖子／大槻一枝

泰山の頂には、銅の瓦で葺いた宮殿式建築「碧霞祠」があり、泰山の主「碧霞元君^{原注}」という神が祀られている。

伝えるところによると、碧霞元君は石敢当の娘であった。石敢当は泰山東南の大きな山—徂徠山の麓に住む真面目で仁義に厚い人であったが、家は貧しく農業で生計を立てていた。彼には男の子が無く、娘が三人いた。長女と次女は早くに嫁ぎ、家には三女が残っていた。三女は小さいころから働き者で心根の優しい娘であった。

二人の姉が嫁いだ後、苦しい生活の助けになろうと彼女は徂徠山に入り、焚き木を集めて山陽の市で売り捌いた。彼女は次第に成長し、徂徠山にも慣れ親しんで行った。

ある日、彼女が山で焚き木を伐っていると、たちまち空が真っ暗になり暴風雨になった。激しく降る雨に雨宿りするところもなく、真っ暗な中で三女は道に迷い、帰ることが出来なくなった。慌てれば慌てるほど、道は分からなくなる。困っていると遠くに灯火が見えた。

彼女は灯火を目当てに一目散に走った。近寄って見ると、灯火は山の洞から漏れて来る。彼女はためらったが、風雨から身を隠すところを探さなければならぬ。思い切って入って行くと、老夫人が焚火にあたっていた。

三女は夫人を見ると安心して前に寄り、焚き木を伐っているうちに雨に遭い、道に迷ったことを述べて、夫人の助けを求めた。夫人は喜んで彼女を受け入れてくれた。翌朝、三女は焚き木を背負って家に帰ったが、それ以来、三女は山に登ると必ず老夫人を訪ねて、ある時には人知れず焚き木を置いていき、ある時には水を汲み、山洞の掃除をして、何くれとなく夫人の身辺を見守った。

こうして二人は次第に親しい間柄になって行った。ある日、老夫人は三女に不思議なことを告げ

た。「貴女は俗世界の人間ではない。下界に下りた仙女なのですよ。“運”も“命”も“果報”も人とは違うのです。貴女は徂徠山にはもう住めないのです。徂徠山は貴女に踏まれて、三尺もへこんでしまったのですよ」。

現在の徂徠山は泰山とは違い、山頂は平らで太平頂と呼ばれていて主峰がない、なぜか？ それは三女に踏み固められたからだという。老夫人は「貴女は徂徠山には住めない。どこかに移らなければ！」。

しかし、三女は「私は何処へ行けばいいのでしょうか？ ここには両親もいるし・・・」。

これに対して老夫人は、「ここから西北の方角へ約五十里ほど行くと、そこに泰山という大きな山がある。貴女は泰山へ行って住みなさい。泰山にはまだ“主”がない。行って見てごらん。そのうちに仙人があちこちから集まって来て、泰山の主を決める日が来ます。貴女は先に泰山に行って、山の中腹に生えている大きな松の木を探し出し、その樹の下を掘るのです。三尺も掘り下げると木魚が出て来る。木魚を取り出して片方に置き、さらに掘り下げる。また三尺ほど掘り下げたら、貴女が履いている刺繍をした靴を片方脱いで埋め、さらに木魚をもとのところに埋めなおしなさい。そして、泰山の主を決める時を待てばよい」。

三女は聞き終わると、さっそく泰山に向かい、老夫人が言った大きな松の木を探し当てた。そして言われたように、樹の下を三尺掘り下げると木魚が埋められていた。そこで、木魚を取り出し、また三尺掘り下げて彼女の靴を埋め、木魚をもとのところに埋めなおした。

さて、老夫人が告げたように玉皇大帝がそれぞれの地方から、神仙や南海の竜王ら呼び集めた。彼らは泰山に集まった。天下の名山にはそれぞれ主が決まっていたが、泰山だけは、まだ主が決まっ



泰山南天門への石段(ウイキペディアより)

ていなかった。そこで、神仙らは誰を泰山の主にするかを決めることにした。

どのようにして決めるのか？ これまでの方法は目指した山に早く着いた者が、その

山の主として認められるのであった。

そこに玉皇大帝が現れた。そして諸神を見回して、「最初に到着したのは誰か？」と尋ねた。

柴王が進み出て、「私が一番でした。私が泰山の主になるべきです」。

玉皇大帝が、「早く来たことの証拠は？」と問うと、「私は松の木の下に読経に使う木魚を埋めて来ました。どうぞご覧ください」。

証拠品と聞いて諸神は皆その方を見つめた。

そこに三女が走り出て、「一番先に着いたのは私です」と叫んだ。大帝は「お前が早かった証拠は何か？」と問うと、三女は「私は松の木の下に刺繍した靴を埋めて来ました」と答えた。

神仙たちは早速、現場を見に行った。木の下を掘り下げること三尺、先に出て来たのは柴王の言った木魚だった。柴王は確かに早く来ている。

しかし、三女は、さらに深く掘り、彼女の刺繍した靴が出て来るところまで掘り下げた。靴が見つかった！

木魚より下に埋められていた三女の靴は、柴王の木魚より早かったことの証拠になった。

こうして泰山の主は三女と決まった。玉皇大帝は泰山を三女に与えると共に、「碧霞元君」という称号を与えた。

柴王はもちろん不服だった。彼は怒って山の松の木を一本残らず抜いてしまった。そして木をひとからげにして、天秤棒で担いで行った。彼は三女を、木も生えない裸の山で焼き殺してしまおうと

企んだのだ。一本残らず抜いた木は重く、担いでいるうちになお重さを増した。

彼は「こんなことをしては間尺に合わない。抜いた木を担いでくる必要はどこにあるのだ」と独り言を言って、南天門まで来ると荷を下ろし、「どこへでも行ってしまえ！」と足で松の木を蹴飛ばし、目の前の山めがけて突き飛ばした。そのため前の山は松の山となった。次の一束も蹴飛ばされて「后石坞」に転がり、后石坞を緑の松林に変えた。

こうして、泰山には木が生えなくなり、三女を悲しませた。彼女は家が恋しくなり、独りで涙を流した。山に生えた小さな木は「泣きの木」と呼ばれた。

彼女を泰山に導いた老夫人とは誰だったのか？ それは三女を助けるために、下界に下りて来た観音菩薩であった。三女が泰山の碧霞元君となった後も、観音菩薩はしばしば彼女を尋ね、泰山の上にはいつも五色の雲がかかっていた。五色の雲は三女のために、太陽の直射を遮っていたのである。後に、人々は三女のために美しい祠を建てた。それが「碧霞祠」である。 (おわり)

出典：『泰山伝説故事』中国民間文芸研究会等編、中国民間文芸出版社、1983年

■原注

碧霞元君：地元では「泰山のおばあ様」と呼んでいる。由来は諸説あるが、ある人は「彼女は玉皇大帝の娘」と言い、またある人は「玉皇大帝の妹」という。ある時は「彼女は石敢当の娘」と言われる。

■参考

泰山：中国の山東省にあり、封禪の儀式が行われた山として名高い。標高 1545m。頂上に登るには一般道の中腹からロープウェイで簡単に登れるが、麓から頂上の近くにある南天門までは 6,660 段の石段もある。上から見ると目が眩むようである。泰山は「東岳大帝」「碧霞元君」「眼光奶奶」を祀っている。「東岳大帝」は生死に関わることに全般に、「碧霞元君」は出産など女性に関する願い事全般に、「眼光奶奶」は目に御利益があると信じられている。なお、封禪の儀式とは、「帝王が天と地に、王の即位を知らせ、天下が泰平であることを感謝する儀式」で、多くの皇帝がこの儀式を行っている。

“国民詩人”と呼ばれた北原白秋(完)

和田 宏

〈この道〉

童謡『この道』は、白秋が1925年7月に北海道・樺太を訪問した際に作ったもので、1926年に児童雑誌『赤い鳥』に発表した。この詩に山田耕筰がメロディをつけた。

『この道』

- ①♪この道はいつかきた道 ああ そうだよ
アカシアの花が咲いてる♪
- ②♪あの丘はいつか見た丘 ああ そうだよ
ほら 白い時計台だよ♪
- ③♪この道はいつか来た道 ああ そうだよ
お母さまと馬車で行ったよ♪
- ④♪あの雲もいつか見た雲 ああ そうだよ
山査子の枝も垂れてる♪

私が住んでいる川崎市多摩区では防災行政無線が午後5時になると、メロディ・チャイムを町に鳴り響かせる。メロディは季節によって異なっており、1月から4月までが『浜千鳥(作詞：鹿島鳴秋、作曲：弘田龍太郎)』、5月から9月までが『椰子の実(作詞：島崎藤村、作曲：大中寅二)』、そして10月から12月までが『この道』である。夕陽に霞む我が町に、『この道』のメロディーが流れると、私は、“嗚呼、今日も終わりに近づき、あとは夕ご飯を食べ、温かいお風呂に浸かって寝るだけだ、一日を恙なく過ごすことが出来たなあ〜”と、八百万の神々に感謝するのである。

〈やなぎのわた〉

童謡『やなぎのわた』は、1925年に白秋が作詞し、耕筰が作曲した。奉天の春の街に綿毛の付いた柳の種子・柳絮が飛ぶ様子を歌っているが、白秋が満鉄の招きで、満州・蒙古を実際に訪れる以前に作られた作品だ。

『やなぎのわた』

- ♪やなぎのわたの 飛ぶころは、
黄いろいほこりも かすみませ

乗れ乗れ ちいさな驢馬のうへ
夕日の古塔を 見に出よか
奉天北陵 新市街
飛べ飛べ やなぎの毛の絮よ
房つき帽子を うち振ろか
やなぎのわたの 飛ぶころは
日本のお祭思ひだす♪

「柳絮」は、北宋の蘇軾が1079年に作った、「東欄梨花」という七言絶句の詩にも出て来る。

梨花淡白柳深青(梨花は淡白にして柳は深青なり)
柳絮飛時花滿城(柳絮飛ぶ時 花は城に満つ)
惆悵東欄一株雪(惆悵す 東欄一株の雪)
人生看得幾清明(人生看得るは 幾清明)

「梨の花は淡い白で、柳は深い青色に染まっている。その柳の花が飛ぶ時、梨の花が街中に満ちる。ところが自分は悲しい気分を抱きながら、東の欄干に雪のような花を見る。人生で、あと何回、このように清明の季節を迎え、美しく咲く花を見ることが出来るだろうか」。

〈白秋とロシア民謡〉

白秋は満鉄の招きで、1930年(昭和5)に満州・蒙古を訪れた。軍国主義一色に染められてゆく暗黒時代の前だった。翌年にロシア民謡系の歌も作っている。1931年の『露西亞人形の歌』である。

そのうちの一つの『ニャーニュシカ(お乳母ちゃん)』の歌詞を紹介すると、

- ♪夕焼よ、ニャーニュシカ
レビョーンカ、あれ、御覧
スカミューカ こはれてる
ミエーリニツァ 廻ってる♪

注：ニャーニュシカ=乳母、レビョーンカ=小さい子
スカミューカ=ベンチ、ミエーリニツァ=水車

〈白秋と小田原〉

『待ちぼうけ』『ペチカ』『からたちの花』『やなぎのわた』の4曲とも、豊かな自然に恵まれた小田原で創作しており、満州の教育委員会から日

本人の子供向けに童謡を作ってくれと依頼されて、これらの自由で素朴な童謡を作った。

白秋は、生涯にわたって転居を繰り返すが、1918年～1926年の8年間（33歳から41歳まで）は小田原に住んだ。

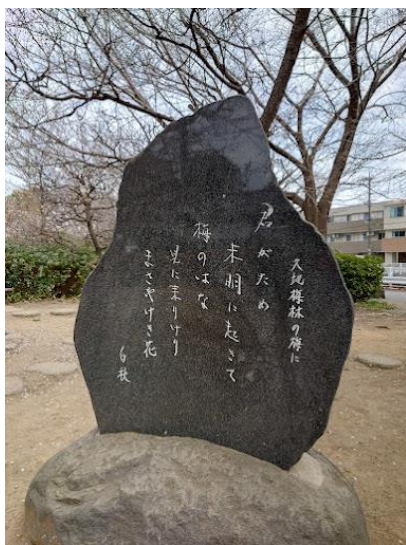
JR小田原駅西口から上り坂を歩くと、『待ちぼうけ』の歌詞を記した掲示板がある。白秋が散策したとされる約4キロの小道は、『白秋童謡の散歩道』と名付けられ、道沿いの9ヶ所に童謡の掲示板が建っている。白秋童謡記念館もある。元気な人は、散歩がてら歩いてみてはいかがだろうか。

〈小田急線沿線の歌碑〉

川崎市高津区の久地梅林公園内に、“久地梅林の梅に”に続けて、『君がため ^{まだき}未明に起きて 梅のはな 見に^{きた}来りけり まさやけき花』という歌碑がある。この歌は、1933年2月27日、夕方の与謝野鉄幹の還暦祝賀会に梅を題材にした短歌を持ち寄ることになっていたため、白秋は、当日の早朝、砧の渡し船で多摩川を渡り、梅林として広く知られていた久地梅林にやって来て、この歌を作り、夕方、東京会館で行われた祝賀会で贈答歌として披露したものである。

白秋は、1931年～1940年の9年間（46歳から55歳まで）、小田急線の祖師ヶ谷大蔵駅からほど近い世田谷の砧村大蔵に住んでいた。

南武鉄道が、少し前の1927年に川崎一登戸間で開通し、「久地」駅は、当時、「久地梅林」駅という名前であった。同じ年に小田原急行電鉄が新宿一



「久地梅林公園」内の歌碑(筆者撮影)

小田原間で全線開通している。

我が家の近くに在る白秋の歌碑は、この他にも、多摩区登戸の丸山教本庁に“多摩川音頭の碑”、そして、麻生区王禅寺の王禅寺境内に“禅寺丸柿を詠んだ歌碑”がある。



柳川の代表的風景(ウイキペディアより)

〈白秋と故郷柳川〉

白秋は1941年（昭和16年）春、数十年ぶりに柳川に帰郷し、南関で叔父の墓参をし、さらに宮崎、奈良を巡遊した。

これに関連して、中国の詩人・陶淵明の『帰去来の辞』を下敷きに、『帰去来』と言う長い詩を作った。晩年の白秋が、^{めしい}盲になりながら故郷筑紫・柳川へ馳せる想いを詠み込んでいる。

山門は我が産土
雲騰る 南風のまほら
飛ばまし 今一度
筑紫よ かく呼ばへば
戀ほしよ 潮の落差
火照沁む 夕日の渦
盲ふるに 早やもこの眼
見ざらむ また葦かび
籠飼や 水かげろふ
帰らなむ いざ 鶺鴒
かの空や櫓のたむろ
待つらむぞ 今一度
故郷やそのかの子ら 皆老いて遠きに
何ぞ寄る 童ごころ

その翌年（1942年年11月）、白秋は杉並区阿佐ヶ谷で57年間の人生に幕を下ろした。

柳川市には『帰去来』の詩碑（センサー付きで『帰去来』が流れる）が建てられており、その前で、毎年1月25日に「北原白秋生誕祭」、11月2日を挟んだ3日間に「白秋祭」が行われている。

北原隆吉が16歳の時に自分につけた雅号の『白秋』は、「人として穏やかな佇まいを見せ、人生の実りを楽しむ時季」という意味になるだろう。（完）

2桁同士の掛け算を暗算で求める早業 (3) 河野公雄

前回まで4つのパターンを紹介しました。パターン1~4に含まれる組合せは246通り。全体の7.4パーセントというところです。

今回は、2つの2桁の数の十位の数が比較的小さい場合に適した計算法を紹介します。

■パターン5

$$1? \times 1?$$

《?》は、1から9までの任意の数

十位の数がどちらも1、一位の数は何でもいいです。例えば、 12×13 の暗算、頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$12 + 3 = 15$ 、150
(じゅうに・さん、じゅうごひゃくごじゅう)
 $2 \times 3 = 6$ (に・さんがろく)
156

12×13 から、12 と、13 の一位の数3を取り出し、これらを足し合わせて15とします。更に、それを10倍して150を得ます。次に、一位の数2と3を掛け合わせて6を得ます。150と6を足した156が答えになります。

次は、 13×16 です。



$13 + 6 = 19$ 、190
(じゅうさん・ろく、じゅうくひゃくきゅうじゅう)
 $3 \times 6 = 18$ (さぶろくじゅうはち) 208

13×16 から、13 と、16 の一位の数6を取り出し、これらを足し合わせて19とします。更に、それを10倍して190を得ます。次に、一位の数3と6をかけあわせて18を得ます。190と18を足した208が答えになります。

もう一つやってみましょう。 17×19 です。

一位の数が大きくなってもやり方は同じです。



$17 + 9 = 26$ 、260
(じゅうしち・きゅう、にじゅうろく、にひゃくろくじゅう)
 $7 \times 9 = 63$ (しち・くろくじゅうさん) 323

17×19 から、17 と、19 の一位の数9を取り出し、これらを足し合わせて26とします。更に、それを10倍して260を得ます。次に、一位の数7と9を掛け合わせて63を得ます。260と63を足した323が答えになります。

11×11 から、 19×19 までの計算結果は以下の表のようになります。

	11	12	13	14	15	16	17	18	19
11	121	132	143	154	165	176	187	198	209
12		144	156	168	180	192	204	216	228
13			169	182	195	208	221	234	247
14				196	210	224	238	252	266
15					225	240	255	270	285
16						256	272	288	304
17							289	306	323
18								324	342
19									361

パターン5の計算法を基本にして、適用範囲を広げていきましょう。2つの発展形があります。1つ目の発展形は、10台と20台、10台と30台のように、一方の数が必ず10台である形です。2つ目の発展形は、20台と20台、30台と30台のように、十位の数が同じである形です。

■パターン5の発展形(1)

例えば、10台と20台の掛け算として、 17×26 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$26 + 14 = 40$ 、400
(にじゅうろく・じゅうよんよんじゅうよんひゃく)
 $6 \times 7 = 42$ (ろく・しちしじゅうに) 442

パターン5と変わったところ、わかりますか。ま

ず、 17×26 を 26×17 としましょう。10 台の数はいつも後ろに、これが重要です。26 と、17 の一位の数 7 を取り出しますが、この 7 を 2 倍して 14 とします。相手の数が 20 台だからです。26 と 14 を足し合わせて 40 とします。更に、それを 10 倍して 400 を得ます。次に、一位の数 6 と 7 を掛け合わせて 42 を得ます。400 と 42 を足した 442 が答えになります。

次は、10 台と 30 台の掛け算です。 19×34 をやってみましょう。



$34 + 27 = 61, 610$
 (さんじゅうよん・にじゅうしち
 ろくじゅういち ろっぴやくじゅう)
 $4 \times 9 = 36$ (し・く さんじゅう
 ろく) 646

まず、 19×34 を 34×19 にしましょう。 $34 + 27$ の 27 はわかりますか。19 の一位の数 9 を 3 倍したものです。相手の数が 30 台だから 3 倍するのです。 $34 + 27$ で 61、10 倍して 610 です。次に、一位の数 4 と 9 を掛け合わせて 36 を得ます。610 と 36 を足した 646 が答えになります。

10 台と 90 台の掛け算も同じ要領でできます。 16×97 をやってみましょう。



$97 + 54 = 151, 1510$
 (きゅうじゅうしち・ごじゅうよん
 ひゃくごじゅういち せんごひゃく
 じゅう) $7 \times 6 = 42$ (しち・ろく
 しじゅうに) 1552

細かい説明は省きましょう。54 は 16 の一位の数 6 を 9 倍したものです。足す数が大きくなってきました。計算が少し面倒になってきますが、相手の数が大きいのでしかたありません。

■パターン 5 の発展形(2)

パターン 5 の 2 つ目の発展形は、20 台同士、30 台同士などの掛け算です。大きい数になると、頭の中で処理しなければならない数が大きくなっていくので、せいぜい 50 台同士の計算までに止めておくのが良いでしょう。

それでは、20 台同士の計算の一例として、 27×29 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$27 + 9 = 36, 720$
 (にじゅうしち・きゅう、さん
 じゅうろく ななひやくにじゅう)
 $7 \times 9 = 63$ (しち・く ろく
 じゅうさん) 783

パターン 5 と変わったところ、わかりますか。まず、 27×29 から、27 と、29 の一位の数 9 を取り出し、これらを足し合わせて 36 とします。更に、それを 20 倍して 720 を得ます。ここが変わっています。20 台同士の計算では、ここで 20 倍しなければなりません。次に、一位の数 7 と 9 を掛け合わせて 63 を得ます。720 と 63 を足した 783 が答えになります。

次に、30 台同士の掛け算をやってみましょう。 34×37 でやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$34 + 7 = 41, 1230$
 (さんじゅうよん・なな、よん
 じゅういち せんにひゃくさんじゅう)
 $4 \times 7 = 28$ (し・しち にじゅう
 はち) 1258

同じ要領で、 34×37 から、34 と、37 の一位の数 7 を取り出し、これらを足し合わせて 41 とします。更に、それを 30 倍して 1,230 を得ます。30 台同士の計算では、ここで 30 倍しなければなりません。次に、一位の数 4 と 7 を掛け合わせて 28 を得ます。1,230 と 28 を足した 1,258 が答えになります。

90 台同士の掛け算も同じ要領でできます。 96×98 は以下のようになります。



$96 + 8 = 104, 9360$
 きゅうじゅうろく・はち、ひゃくよん
 きゅうせんさんびゃくろくじゅう
 $6 \times 8 = 48$ (ろく・は しじゅう
 はち) 9408

説明は省きますが、頭の中で扱う数字が大きくなって、脳が混乱してくるでしょう。実は、90 台同士の掛け算には、びっくりするような解法があるので。次回、それを紹介します、お楽しみに。

(つづく)

●参考:高橋清一著、ニヤンタ・デシュパンデ監修、「脳をきたえる インド数学ドリル 入門」、日東書院本社、ほか

みんなの広場

● 曳履の曳のピンインは？

後藤芳昭

NHKのカルチャーラジオで「漢詩を読む」という番組があります。

先般その中で明の分徴明の詩題・伏日（三伏の日・七言律詩）が取り上げられました。

その中に、可堪曳履見時人（堪うべけんや 履を曳き時人に見ゆるに）とありました。

漢詩をピンインで読むことにしている僕は、この曳の1字でフリーズしてしまいました。

普通、部首や偏を頼りに辞典を探すのですが、この曳はどう引けばよいのかわからなくなりました。そこで、漢字を書き込めばピンインが分かる10年以上前に使っていた電卓辞典「中分通」を引っ張り出して試しましたが、今そのやり方も忘れてたようでは使えないのです。

そんな中、救世主が登場しました。おりしもお盆休みで実家に帰省した娘夫婦（二人は学生時代に北京留学の経験あり）に「中分通」での解決を訴えたところ、「中文通」ではやはりその機能は再現できませんでした。娘婿は、スマホのグーグル検索で答えを見つけてくれました。検索方法は、「曳く ピンイン」でOKとのこと。

まさに、恐るべしグーグル！ 移動手段を歩行から車に変えた気分で今後の憂いがなくなりました。昭和時代の僕としては、早く令和時代になじむ必要があると痛感した次第。

ちなみに曳履のピンインは、(yè lǚ)です。

■編集部より: 拼音はワードのルビ機能でもできます。また、中国サイト「百度」で検索すると拼音付きの古典詩がたくさん閲覧できます。音声付きもあります。

▲検索の例: 簡体字で検索することが肝要です。

上記の場合、(分徴明 伏日 拼音)で検索。

結果:

<https://www.gushiciku.com/shiwen/pinyin-b9f27a7.html>
わんりいホームページからは、リンクページに飛びます。

● 薬膳料理講習会

わんりいは、10月14日（祝・月）に、薬膳料理講習会を開催します。詳細は次ページの行事案内をご覧ください。講師は、会員で中国・河南省出身の趙迪さんです。

趙さんは、漢方医のお母さまの教えに加えて、ご自分でも勉強されて、薬膳料理の知識が豊富な方です。以下に、趙さんの講習会に向けてのメッセージをご紹介します。

「秋は乾燥が進み、体が冷えやすくなる季節です。この講習会では、薬膳の基本を学びながら、秋の季節に適したメニューとして『蓮根とスペアリブのスープ』と『梨のシロップ煮』を作ります。

蓮根は体に潤いを与え、スペアリブは体を温める効果があり、梨はのどを潤し、乾燥から守ります。これらの組み合わせは、秋にピッタリの薬膳料理とデザートです。

講習を通じて、日々の食生活に薬膳を取り入れ、健康な体を維持する方法を学びます」。

わんりいは、久し振りに薬膳料理の講習会を開きますので、新しい知識が沢山得られると思います。どうぞお楽しみに。

◇ 満柏画伯の漢訳俳句 ◇

けいとう

鶏頭の十四五本も

ありぬべし

正岡子規

jī guān huā kāi shí sì wǔ
鸡冠花开十四五

yǒu fǒu yǒu fǒu
有否 有否

【わんりいの催し】

＊＊ 薬膳料理講習会 ＊＊

夏の疲れを取る秋の薬膳料理講習会

- 会場：川崎市麻生市民館 調理室
 - 日時：10月14日（祝・月）10：00～14：30
 - 講師：趙 迪（河南省出身）
- 会費・レシピ等詳細は10月号わんりいで。

~~~~~

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。\*

- 日時：9月17日（火）10：00～11：30
- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：10月20日（火）10：00～11：30
- 会場：玉川学園コミュニティーC多目的室3
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

＊＊ 中国語で読む 漢詩の会 ＊＊

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：9月29日（日）10：00～11：30
10月は後刻決定
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp
(有為楠)

■9月・10月定例会 代表宅

- ▼9月12日（木）13：45～
- ▼10月3日（木）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼10月号 未定
- ▼11月号 未定

☆☆ 編集後記 ☆☆

2024年も、3分の2が過ぎてしまいました。1月1日、能登地方を襲った大地震に、波乱の一年を予感させられました。お正月の家族だんらんを楽しみに帰省して、災害に遇われた方も多かったようです。お気の毒なことです。

幸い難を逃れた人間から見ると、この地震、断水・停電の復旧が極端に遅かったように感じます。続いて4月に起こった台湾の大地震では、能登地方と同じように山地の多い地域だったと聞いていますが、停電・断水の被害は少なく、復旧も早いようでした。

きっと、日本の水道管・送電線は全国的に老朽化が進んでいるせいで、被害が大きかったのでしょう。日本は国民だけでなく、水道・電気・道路などインフラにまでも老化が及んでいるのですね。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし  
郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円  
■問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりい’ 296号の主な目次

|                                         |    |
|-----------------------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(75)『感恩図報』……………                 | 2  |
| 漢詩の会報告 白居易《暮れに立つ》……………                  | 3  |
| 「中原雑感」(44)「少浪底」の<br>国際的ブランド化（つづき2）…………… | 5  |
| 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行（15）……………                | 7  |
| 中国の歴史を彩る美人百花（17最終回）<br>「秋瑾」……………        | 9  |
| 民話「碧霞元君」の来歴……………                        | 11 |
| “国民詩人”と呼ばれた「北原白秋」（完）…                   | 13 |
| 2桁同士の掛け算を暗算で求める早業(3)…                   | 15 |
| みんなの広場……………                             | 17 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………                     | 18 |